

名著に学ぶ経営 ～ その10：何のため、誰のための会社か

名著を通して3000年に渡る社会の中での人間の営みを見てくると、或いは30年も自分や周りの会社を見ていると、国家にしる会社にしる、組織のあるべき姿が自ずと決まってくる。

私どもの会社では確信をもって「社員の為の会社である」と公言している。何のために会社に社員が集まっているかといえば、間違いなくそれぞれの人たちが自分や家族の生活の為に収入を得る必要があるからである。できることなら結婚して子供を作って子供が望む大学や専門学校までやり、マイホームを建てて間違いなくローンを払い終えるというのが、多くの人の望みであろう。そのためには少なくとも500万円の年収が欲しいところであるし、将来は1千万円の年収くらいは目指したいところである。一人でも多くの社員がそれらの望みを達成することが、会社の目指す第一の目標である。

社員と並んでお客様も大事であるが、これは私達の第一の望みである自分たちの生活する費用を提供してくれる大切な存在だからである。そのお客様であってもやはり私達と同じように自分たちの生活の為に働いているのであるから、それに見合う売り上げや利益を得られるようにしなければならない。そのために、手ごろな価格で必要な時に必要な品質の製品を提供することが私達の責務である。そこに至って初めてものづくりというものが出てくる。つまり、序列でいえば、社員の生活→お客様の満足→良い製品やサービスということになる。しかし、会社の求めるものはそれだけにとどまらない。私達の仕事を手助けしてくれる外注先や、部材や設備などを提供してくれる業者なども大切な存在であり、これらについても同じように生活が成り立つようにしなければならない。ただ安く買うというのではなく、共存できるような配慮が必要である。

当事者として社員、お客、納入業者が上がったが、それに加えて国・県・市町村へも成果を還元しなければならない。それらに対しては不満がないわけではないが、我々が使っている道路にしる学校にしる役所の仕事にしる必要なものであるから、それ相応の税金を納める必要がある。納税を嫌がる経営者も多いがこれほとんど間違いである。考えてもみよう、10人でバーベキューをやるとしたら、肉を買う、飲み物を買う、費用を払う、作業をするなどそれぞれが自ら負担をいとわない。それが10万人の市や100万人の県、1億人の国ともなると途端に出し惜しみする人が多くなる。自分が市や県、国の一員であるという自覚を持って納税を行うべきである。また株主への還元も重要な事である。今でこそ資金に困らなくなっているが、創業時は資金がない中で事業に賛同して出資してくれた人達には、何年経ってもたとえ代がかわっても報いるべきである。さらには地域にも多少なりとも還元しなければならない。学校などから見学の要望があれば快く応じるべきであるし、寄付などの話にもできるだけ答えるべきである。今の当社では多忙過ぎて実現できないが、周辺の清掃祭への参加などもできたら素晴らしいことだと思う。